MOTサテライト　２０１７春　往来往来

カニエ・ナハ＋大原大次郎「旅人ハ蛙、見えない川ノ漣」

詩人自身による解題と、詩の原文

カニエ・ナハ

私が私淑する詩人・西脇順三郎は川のかたわらに生まれ、その詩に水のイメージの頻出する、《水辺の詩人》でしたが、彼の代表詩集『旅人かへらず』に倣って（をもじって）、大原大次郎さんと私のこの連作を「旅人ハ蛙」と名付けました。西脇は芭蕉を愛し、深い影響を受けましたが、芭蕉はこの深川のほとりから、おくのほそ道の旅へと出発しました。「見えない川」は深川あるいは清澄白河を流れる、私たちには見えない、もうひとつの川。「ノ漣」はのれん。のれんのさざなみに、見えない川のせせらぎを、聴いてもらえたら嬉しいです。

※この連作には基本的に、（1）松尾芭蕉、小津安二郎、伊能忠敬、平賀源内…といった、深川にゆかりのある著名人の作品や言葉。（2）東京都現代美術館の収蔵作品名ならびにその作家名。以上（1）（2）のいずれか、あるいは両方が引用・参照されています。

［A］iki ESPRESSO TOKYOの詩

芭蕉句をお借りしてローマ字に変換しました。お店のお名前「iki」がまんなか辺りに含まれています。俳句って意味ももちろん大事ですが、音・調べもたぶんおなじくらい大切で、俳句を翻訳する際は、意味を翻訳したものと、このように音をそのまま伝えるものと、両方あってもいいかもしれません。今回の連作をとおして、大原さんのデザインはこののれんをはじめ、連作のテーマである「川」「水」を表すように、反射・反転のイメージが何度も現れます。「ノ漣」＝のれん、の揺れる水面をのぞいてみてください。

［B］NOiS 清澄白河の詩

自転車（BIKE）屋さんということで、東京都現代美術館（以下MOT）の収蔵作品からナム=ジュン・パイク《TV時計》のイメージをお借りしました。パイクは俳句ではなくて短歌を詠んだようですが、ここではパイクが俳句を書いた（ら）、という設定の短歌です（ややこしくて、すみません）。自転車のふたつの車輪は、月であり時計であるかもしれません。《月は最古のTV》はMOTの収蔵作品ではないですが、自由律俳句のような美しいタイトルなので、ここにお借りしました。

［C］三河屋精米店の詩

お店の店頭にもともと掲げられている「あったかーい家庭に　あったかごはん　愛をはこぶ」。これにまさる「詩」は私には書けないと早々に白旗をあげて、アプロプリエーション（盗用・流用）で、せっかくなのでMOTの至宝のリキテンスタインで、と。「あったかーい…」の上に「ロイ・リキテンスタイン《ヘア・リボンの少女》」のルビをつけて、あとは大原さんにお任せしました。大原さんに「英訳しましょう」と云われて、私が考えたのが「We come warm home , We have nice rice love」でしたが、あまりにも拙くてボツなり、MOTの広報担当のパイリンガルのOさんが見事に訳してくださいました。その際、大原さんが私の「nice rice」だけ残してくれたのですが、それ以外、私はほとんど何もしていない、「みんなの詩」です。

［D］ALLPRESS ESPRESSOの詩

MOTのエントランスから飛び出した、ヤノベケンジさん《ロッキング・マンモス》に乗って、伊能忠敬がうたたねしているイメージです。芭蕉は旅の道中、馬に乗りながら眠ったらしい。オールプレスさんの建物は木材倉庫だった木場らしい建物。そこに佇むマンモスのような巨大なコーヒーマシーン。大原さんは店内に積まれたコーヒー豆の袋のタイポグラフィと響きあうようなデザインで詩を再構成してくれました。

［E］アライズ コーヒーロースターズの詩

この土地の著名人、新井白石（アライズ、からの……）、伊東深水、山東京伝、滝沢馬琴らが、いつもにぎわうこのお店に集って、時空を越えて井戸端会議を開いています。「ラミパスラミパス…」のような感じで、「ハクセキハクセキフカイミズ、キョーデンキョーデンバキンバキン」と唱えてみてください。この詩は音の韻から、中西夏之さんの《韻》を横目に見つつ、私自身で視覚の韻に変換したバージョンもあり、私自身による原詩が２バージョン、大原さんによるのれんもリバーシブルで２バージョン、計４バージョンもあるのです。

［F］mamma cafe 151Aの詩

「151A」さんの店名を見て、大原さんから「数字と英語のみの詩はいかがでしょう」とのリクエストをいただき、私からは、では宮島達男さんのイメージで、のリクエストを。無作為な数字の並びにこそ「詩」があると判断し、MOT STAFF ブログにあった、MOT 収蔵作品の宮島達男さん《それは変化し続ける　それはあらゆるものと関係を結ぶ　それは永遠に続く》の写真の数字の並びをトレースしました。でも何か所かこっそり手を入れてあります。大原さんはデジタルの文字が明滅しているように見える、いままでに見たことのないのれんに仕上げてくれました。

［G］fukadaso CAFEの詩

深川とfukadaso（深田荘）さんをつなぐ「深」の字。白川静さんの漢字辞典によると「水中のものをさがすことを「深」といい、水がふかいの意味となる」とあります。蛙は古池にとびこんで、なにを探そうとしているのでしょうか。この連作のタイトルは「旅人ハ蛙、見えない川ノ漣」ですが、この作品はその総タイトルを象徴するように、蛙が古池ならぬ深川にもぐって何かをさがすイメージを視覚化しました。私の原詩もすでに視覚詩なのですが、ここから大原さんがさらに展開させてくれています。のれんにて、川のようにみえる伏せ字は、私から大原さんへ送ったメールの文章とのこと。左下、私のサイン「カニエ」がうっすらと見えます。そういえば私の名前の「蟹」も「江」も、水に縁があるようです。

［H］しまぶっくの詩

本屋さんなので、読み物をイメージしたのれんを、との大原さんからのご提案で、今回の全17篇のなかで唯一、読み物らしい詩になりました。さいごに唐突に出てくる「マラドーナ」は、こちらのお店のご主人がマラドーナの大ファン、という以上に神さまのように崇めていらして。本というのは、本当は手ではなくて、足で読むものなのかもしれません。大原さんのデザインで、終盤の「他己、他己、他己、他己（…）」というくだりが、「他己でできた蛸」になっています。

［I］smokebooksの詩

大原さんのアイディアで、このお店のウインドーを活かした、対になるような二幅の掛け軸のようなのれんになりました。アピチャッポンとピピロッティ。現と夢。タナトスとエロス。女と男。芭蕉とその弟子で、資料館通りの端に眠る園女。その園女の辞世の歌と芭蕉の最後の句。煙も本も、現実と夢とのあいだを往来し、漂うものかもしれません。

［J］法苑山 浄心寺の詩

MOTの第２回企画展（にして、初の個展）がアンソニー・カロさんだったということで、カロ作品は外せないと思っていて、このお寺の境内にカロの彫刻を置いたら…と妄想しました。この彫刻の《シー・チェンジ》という謎めいたタイトルがとても詩的です。日蓮宗のお寺なので、蓮のイメージ。小津安二郎の「蓮」についての言葉は、戦争にまつわる発言から。８月にはこの境内で盆踊り（＝玉まつり）も開かれます。災いの火を鎮めるために百度石（お百度詣の目印の石）とともに、踊ります。大原さんが描いてくれた、のれん内の絵は右からカロの彫刻、蓮、百度石。ここに下見に来たときに、大原さんがデザインした「○△□」の藍色カップの話をしたのですが、その形がメタモルフォーゼしたようです。

［K］田巻屋の詩

田巻屋さんは、もともとこののれんと同じ位置に、芭蕉の句が（おなじようにひらがなにひらかれて、右から左よみで）かかげてあって、それが季節ごとに年四回入れ替わるとのことで、これをそのまま踏襲させていただきました。今回私がもってきたこの芭蕉句は、左からよむと、「たま」「き」「や」の文字が見つけられるはずです。私のさがした限りでは、この並びがあるのは、全芭蕉句のなかでただこの一句のみでした。

［L］杉原商店の詩

深川に生まれた、世界を代表する映画監督・小津安二郎。彼の名言のひとつに、「豆腐屋には…」がありますが、彼にとって映画とはお豆腐だったのでしょうか。豆腐のほとんどが水で出来ているように、映画も水で出来ているのかもしれません。このお豆腐屋さん、子どものお客さんに飴玉やラムネをくれるのですが、それが引用した芭蕉句に重なりました。

［M］大久保クリーニングの詩

大久保クリーニングさんの店先にかかげられている「あいろんのかけかた教えます」。「ゐれきせゑりていと」とはエレキテルのこと。「ひのし」は火熨斗＝昔のアイロン、アイロンがけをすること。「ひだし」は引用にあるように、エレキテルによって体の中の悪い火を出すこと。……というわけで、「アイロンのかけ方と、エレキテルのつかい方、教えます。」

［N］あづま屋文具店の詩

あづま屋文具店さんといえば鉛筆に名前を入れてくれるサービス。また、資料館通り名物の「かかしコンクール」はこちらのご店主による企画。MOT 収蔵作品レベッカ・ホルンさん《バタフライ・ムーン》には蝶の尾の部分に鉛筆が使われています。資料館通りの端に眠る園女が、芭蕉と出会った際に読んだ句に芭蕉が下句をつけた歌と、二人の「旅」をめぐる句のデュエット。大根のように太く、その剝いた皮のように透き通った、清澄白河に住もうよ、という「清澄賛歌」です。鉛筆にまつわる詩なので、こののれんを大原さんは鉛筆で描いてくれました。

［O］深川図書館の詩

たった一文字「無」だけの詩です。小津安二郎監督の生家はこの図書館からほど近くにあります。彼は誕生日と命日が同じ日付の十二月十二日で、しかも六十歳の誕生日に亡くなっています。私はこの十二年間くらい、ほぼ毎年かかさず彼の誕生日／命日には北鎌倉・円覚寺にお墓詣りに行っていますが、その彼の墓碑銘が「無」。小津監督は自分の生まれ育った深川の町が空襲で一時「無」に帰したことを、どのように受け止めたでしょうか。「無」という漢字を白川静さんの漢字辞典で調べると「舞う人の形」「雨乞いの祭りの字」とあり、今回、こののれん作品を図書館の空襲関連本の特集展示と併せて展示させていただけるとのことで、空襲・戦災の火を鎮めるための雨乞いの舞＝無、という祈りも込めました。大原さんは、彼がこれまでに制作して来た、文字によるモビールのシリーズ＝《もじゅうりょく》とのれんとを掛け合わせた作品にしてくれました。「無」の一文字が、白旗のようなガーゼのような、白い布をまとって、中空を舞っています。

［P］芭蕉記念館の詩

二階に展示されている「芭蕉遺愛の石の蛙」（伝）が、出土して今年でちょうど100周年ということに気がついて、この石をモチーフに詩を書きました。100年後もこの石は存在し、300年後も芭蕉句はロずさまれていることでしょう。大原さんはこの七文字で、長い文字の歴史の時間を表現してくれました。「石の中の水の音」ですが、左から右に「音の水の中の石」と読んでいただいてもかまいません。吹き抜けの二階から、くだんの石の蛙が、のれんを見つめているようです。

［Q］深川江戸資料館の詩

深川江戸資料館に特設コーナーも設けられている、江東区初の名誉区民である元横綱・大鵬。彼は「夢」という語を鮮やかに、厳しく、異化していますが、芭蕉句に『荘子』の「胡蝶の夢」をモチーフにしたものがあり、大鵬さんの「鵬」の字も、調べてみると、おなじ『荘子』に由来しているのです。そして「鵬」の字の由来にある「天の池」。地下にあるこの施設はあるいは深川の水の底で、私たちは出口へと昇っていく、そこは現実の川面なのか、それとも夢の入口なのでしょうか。大原さんは、この詩の内容に呼応するように、作品内の漢字の文字を、目を瞑って描かれたとのことです。

「命二つの中に生たる桜哉」芭蕉

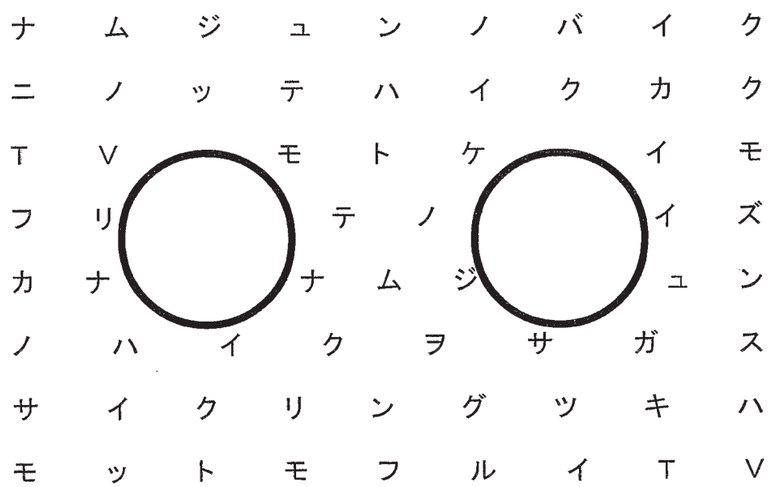
inochifutatsunonakani iki tarusakurakana basho

［A］iki ESPRESSO TOKYOの詩

ロイ・リキテンスタイン《ヘアリボンの少女》

「あったかーい家庭に　あったかごはん　愛をはこぶ」

［C］三河屋精米店の詩



［B］NOiS 清澄白河の詩

［G］ALLPRESS ESPRESSO G詩

ヤノベケンジ《ロッキング・マンモス》

マンモスにただただゆられ

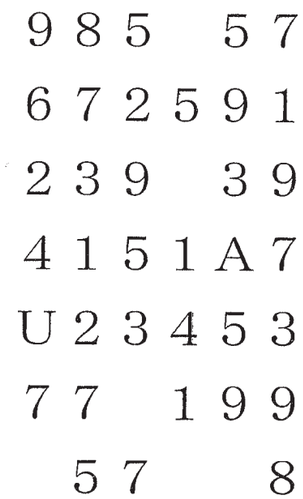
「会は深川黒江町に住み、測量旅行出発にあたっては必ず当宮を参拝していた」富岡八幡宮ホームページより

忠敬は夢のただなか

「馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり」芭蕉

残夢尖ったキバの月

エスプレッソのけぶり漂ふ



［F］mamma cafe 151Aの詩

［O］深川図書館の詩

「小津安二郎（おづ やすじろう）は、日本の映画監督・脚本家。一九〇三年一二月一二日―一九六三年一二月一二日。東京市深川区万年町（現在の東京都江東区深川）に、父貴之助と母あさ冬の次男として生まれた。北鎌倉円覚寺の墓碑にはただ一字「無」と彫られている。」「東京大空襲（下町空襲）と言った場合、死者数が一〇万人以上と等しく多い一九四五年三月一〇日の空襲（寿）のもとの字である。衣の袖に飾りをつけ、袖をひるがえして舞う人の姿である。甲骨文では踊りという所ないの祭りの字に使用する。」その『無』に激しく吹き過ぎる風を、われわれもまた厳粛に受け止めるべきだろう。石はまだ朽ちてはいないのだから。」

無

［P］芭蕉記念館の詩

「大正6年（1917年）9月の台風の高潮の後、常盤一丁目から「芭蕉遺愛の石の蛙」（仮）が出土し、同10年に東京府は、この地を「芭蕉翁古池の跡」と指定」（記念館ホームページより。傍点引用者）。「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。」（『おくのほそ道』）「古池や蛙飛び込む水の音」「閑さや岩にしみ入蝉の声」芭蕉

石の中の水の音

［Q］深川江戸資料館の詩

心ハ刃　月ト月トヲ往来スル

「『心』の上に『刃』を載せて生きて行く。（…）『夢』は、忍び続けた人生の末に訪れるかどうか。――そうじゃないかねえ。」大鵬　「君やてふ我や荘子が夢心」芭蕉　「『荘子』逍遥遊篇では、鵬が次のように描かれている。北の果てにある海に棲む体が数千里にも及ぶ巨大な魚が、これもまた背が数千里にも及ぶ巨大な鳥＝「鵬」と化す。鵬は天を覆う雲のような翼を広げ、南の果ての海すなわち天の池へと向かう。」「さ（冴）ゆる夜のともし火すごし眉の剣」園女「往来往来 ―by the deep rivers」

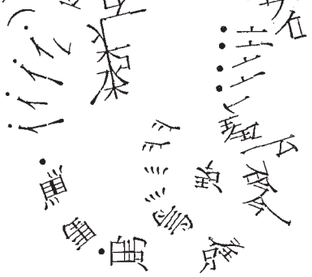
鳥ハ蝶　眉ト夢トヲ往来スル

［J］法苑山 浄心寺の詩

見ろ　この手水舎に
アンソニー・カロ《シー・チェンジ》
カロの頃からの
「寺に寝てまこと顔なる月見哉」芭蕉
海に眠る、真顔の月
「泥中の蓮……この混も現実だ、
蓮の漣、そのままの
そして蓮もやはり現実なんです」小津安二郎
玉まつり　百度石踊る
「蓮池や折らで其まゝ玉まつり」芭蕉
泥の火を鎮めるための

ちのいたまはきつもじしこやまやかな
蕉芭

［K］田巻屋の詩



［E］アライズ コーヒーロースターズの詩《顔 ver.》

［E］アライズ コーヒーロースターズの詩《プロトタイプ》

白石・白石・深（イ）水！
京伝・京伝・馬琴・馬琴！
白石・白石・深（イ）水！
京伝・京伝・馬琴・馬琴！

［L］杉原商店の詩

「豆腐屋には豆腐
豆腐とは
しかつくれない」小津安二郎
真白き映画
リ・ウーファン《緑より》
禹煥の庭
「櫓の声波ヲ打って
水から水を
腮氷ル夜や涙」芭蕉
旅をする、白い
「色付や豆腐に落て
掌に落ちて
薄紅葉」芭蕉
飴玉の薄紅

［M］大久保クリーニングの詩

「源内はわが国最初の電気学者
あいろんとゐ
にて安永五年エレキテルを完成し、
れきせゑりて
この付近深川清住町現在の清澄一丁目
いとひのしと
私宅にて電気実験を行い……」
ひだしのしか
「人の体より火を出し病を治する器を作り出せり」
たをしへます

［N］あづま屋文具店の詩

レベッカ・ホルン《バタフライ・ムーン》
ホルンが青い蝶と月　名入ノ鉛筆滴らせ

「かりて寝む案山子の袖や夜半の霜」芭蕉
「花までは時雨れて残れ檜笠／宿なき蝶をとむる若草」　園女／芭蕉
案山子ノ肩ヲ借りて寝ル　夜半若草霜柱

「たんだすめ住ば鄙ぞけふの月」芭蕉
「大根に実の入る旅の寒さかな」園女
たンだすめここは大根ノ河　縷々流ルル

［G］fukadaso CAFE の詩

「秋の月春の霞見し空は夢かうつつか南無阿弥陀佛」園女
アピチャッポン・ウィーラセタクン《エメラルド》
アピチャッポン　現の月と水の煙
「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」芭蕉
（ピロッティ・リスト《A Liberty Statue for Tokyo》）
ピピロッティ　夢の煙のかけ廻る

［H］しまぶっくの詩

本は島！
通りは川でまちは海
そして私は
「蜥蜴やはかなき夢を
夏の月」芭蕉
東京観光を贈られて
ὀκτώπους（オクトパス）

（以下、
東京都現代美術館収蔵作品
島袋道浩《そしてタコに
東京観光を贈ることにした》より
引用・参照箇所あり）
糸の切れた凧
のようなタコ。あまねく他己は

そのような、自己であり
逆もまたしかり
ὀκτώπους
そして本は島！
頁は貝で、連は漣
「島／／や千々に
くだきて夏の海」芭蕉

あの夏の海ぼくたちは
無人島にただ一冊も
本などもっていく必要無くて、
無人島は無尽蔵な書棚だな？
――だな！　しかし、
そもそもぼくは本を読まない
そもそもぼくは手をもたないし

そもそもコトバをもたないが
もそもそあしを8本もってる
そのそれぞれがぼくたちの
他己・他己・他己・他己
他己・他己・他己・他己
ὀκτώπους
「マラドーナからの見事なパス！」